

## 誕生と親族について

西郷隆盛は文政10年12月7日（1828年1月23日）、鹿児島城下の下加治屋町山之口馬場で、薩摩藩（現在の鹿児島県と宮崎県南西部を治めていた）の藩士（各藩に仕えた武士）西郷吉兵衛の長男として生まれました。次弟は戊辰戦争で戦死した西郷吉二郎、三弟は明治政府で重要な役割を果たした西郷従道、四弟は西南戦争で戦死した西郷小兵衛です。西南戦争では政府軍として西郷隆盛と争い、後に陸軍軍人となった大山巖は従弟にあたります。

## 島津斉彬の登用

西郷隆盛は薩摩藩士としては決して高くはない家格の家に生まれましたが、家柄に関わらず有能な人材を登用していた藩主の島津斉彬の目にとまり役目を与えられました。その後、西郷隆盛は、国内だけでなく広く海外のことにも目をむけていた島津斉彬から様々な影響を受け、藩外にも通用する人材へと成長していきました。

## 島津斉彬の死

しかし、安政5（1858）年、島津斉彬が急死し、島津斉彬の弟・島津久光の子である島津忠義が藩主となりました。西郷隆盛はその頃、島津斉彬の命令で江戸（現在の東京）や京都、大坂で活動していました。しかし、大老・井伊直弼による志士（江戸幕府を倒し、王政を復活させようとして活動する武士達）への摘発が盛んになってきており、鹿児島へ帰りました。また、藩内では島津忠義の祖父・島津斉興が政権を握り、中央政府に関与しない姿勢を示しました。

このような情勢下、近衛家から保護を依頼され鹿児島まで来ていた僧・月照が日向国（現在の宮崎県）へ追放されることになりました。このとき同行していた西郷隆盛は、前途を悲観し、月照と入水自殺を図りました。結果として月照は亡くなり、西郷隆盛は独り助かりますが、幕府の追及をかわすため奄美大島の龍郷村に隠れ住むことになりました。

## 島津久光の召還と二度目の遠島

文久元（1861）年、島津斉興が亡くなり、島津忠義の父・島津久光が「国父」として後見の役割を果たすようになると、藩をあげての行動を取る際は西郷隆盛を呼び戻すという島津久光と大久保利通の申し合わせに従い、同11月、西郷隆盛に召還状が届けられました。

翌文久2（1862）年、西郷隆盛は村田新八とともに筑肥（現在の福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県）の情報を探るため、先発隊として出発しました。このとき、島津久光は西郷隆盛に一旦下関に留まり、自分の一行が到着するまで待機するよう命じましたが、京都や大坂の緊迫した情勢を聞いた西郷隆盛は、待機の命を破り大坂へ向けて出航してしまいました。

島津久光は、西郷隆盛が待機命令を破ったことに激怒し、西郷隆盛らを捕らえて鹿児島に送り帰すよう命じました。さらに、京都鎮撫（治安を守ること）を命ぜられた島津久光は、自らの指揮に従わず伏見（現在の京都府）の寺田屋に集結した尊攘激派（幕命よりも天皇の命令を重んじる人々）の志士、有馬新七ら8名の上意討ち（主君の命を受けて、罪人を討つこと）を執行しました（寺田屋事件）。その結果、島津久光は天皇に厚く信頼されるようになりました。

捕らえられた西郷隆盛に対して、徳之島への遠島が命じられます。その後、さらに沖永良部島へ遠島の命が下りました。

## 再度の召還と長州藩

文久2（1862）年の生麦事件をきっかけに起こった文久3（1863）年の薩英戦争で活躍した誠忠組（西郷隆盛、大久保利通らを中心とする藩内組織。精忠組とも）の面々は、西郷隆盛の罪を許すよう久光に願い出しました。島津久光は藩士たちの強い意見を抑えることが出来ず、元治元（1864）年、西郷隆盛を許し鹿児島に呼び戻しました。

京都皇居諸門で長州藩（現在の山口県を治めていた）を撃退した禁門の変を経て第一次長州征伐が行われ、薩摩藩も出陣しました。しかし、その後勝海舟や坂本龍馬と交流するようになっていた西郷隆盛は、長州藩と共同

で物事を行うよう働きかけ、慶応2（1866）年に長州藩の木戸孝允、薩摩藩の小松帯刀、西郷隆盛、土佐藩の坂本龍馬らの協議を経て、薩長同盟を結びました。その結果、薩摩藩は第二次長州征伐には参加しませんでした。

## 大政奉還建白書と王政復古の号令

慶応3（1867）年6月頃、薩摩の小松帯刀・西郷隆盛・大久保利通は、土佐藩の後藤象二郎、寺村佐膳、福岡孝弟らと会い、薩土盟約を結びました。

同年10月14日、将軍徳川慶喜は大政奉還の上表を朝廷に提出しました。ところが、同日にいわゆる「討幕の密勅」が下りました。

西郷隆盛と大久保利通は、徳川慶喜が主導権を奪回することを恐れ、武力を背景に新政府を打ち立てようとしていました。その結果「王政復古の号令」が発せられ、新政府の幹部として総裁・議定・参与の三職が設置されました（薩摩からは藩主島津忠義が議定、西郷隆盛・大久保利通・岩下方平が参与に）。この三職による小御所会議が開催され、併せて徳川慶喜に対して、内大臣を辞め、領地を朝廷に返す辞官納地が要求されるとともに、会津藩（現在の福島県西部を治めた）・桑名藩（現在の三重県の北中部、愛知県弥富市、愛西市の一部、岐阜県海津市の一部を治めた）の京都警衛の職を解き、帰国するよう命令が下されました。

## 戊辰戦争

慶応4（1868）年1月、大坂の旧幕軍が兵庫に停泊中の薩摩艦を駆逐したことをきっかけに幕府と薩摩は交戦状態に入りました。翌日には鳥羽・伏見の戦いが始まり（戊辰戦争開始）、垂水、新城からも出兵し、それぞれ大坂の警固を行い、奥州（現在の青森県、岩手県、宮城県、福島県、秋田県北東部）各地で戦いました。そして、激戦の末、旧幕軍は大敗しました。西郷隆盛は勝海舟と会談し、両者の尽力により江戸城明け渡し（無血開城）が行われました。

続いて西郷隆盛は上野に布陣した旧幕軍の彰義隊を破り、一方では仙台藩（現在の青森県、岩手県、宮城県、福島県、秋田県北東部

を治めていた）を盟主として設立された奥羽越列藩同盟との「東北戦争」に臨み、勝利しました。翌明治2（1869）年、西郷隆盛は桐野利秋とともに函館戦争に臨みますが、到着したときはすでに戦争は終結していました。

## 西南戦争

新政府成立以降、西郷隆盛は明治4（1871）年に廃藩置県を行うなど明治政府で重要な役割を果たしていましたが、朝鮮への使節を巡る明治6年の政変に敗れて鹿児島に戻り、私学校を設立し若者の教育などに当たりました。

明治9年（1876年）の廃刀令や金禄公債証書条例により帯刀（刀を腰に帯びること）と知行地（大名から家臣に与えた土地）という士族の特権を奪われ新政府に不満を募らせていた士族たちは、熊本県士族の神風連の乱、福岡県士族の秋月の乱、山口県士族の萩の乱などを起こしました。鹿児島でも、士族たちの新政府に対する不満や私学校生徒による火薬庫襲撃、西郷隆盛暗殺の噂などの要因により、明治10（1877）年、西南戦争が起こりました。

西郷軍には九州各地からの士族が加わり、熊本城をめぐる激しい戦いが各地で繰り広げられましたが、最後には政府軍によって鎮圧され、西郷隆盛は鹿児島市の城山で自ら命を絶ち、士族による内乱は終息しました。

### 西郷メモ

このページには、郷土の偉人西郷隆盛について書いてあります。あなたが新しく知ったことや、西郷隆盛という人物について思ったこと、感じたことなどを自由に書いてみましょう。

---



---



---



---



---



---



---



---